

七不思議

江戸時代（1603～1867）中ごろ、7つの奇妙で幻想的な事象が、「永観堂の七不思議」としてうわさで広まった。寺院に奇妙な現象が現れることは珍しくないのである。そして、これらはたいてい、水、樹木や植物の異常な成長、および神秘的な音や光を伴っている。永観堂の七不思議は、大玄関を左に曲がり、古方丈（こほうじょう）と瑞紫殿（ずいしでん）を通り抜け、木道を通り、前に進み釈迦堂を通り、御影堂を通り抜ける下記の順序で見ることがでる。

1) 抜け雀

古方丈の広間は孔雀の間と呼ばれている。それは、襖に孔雀が描かれているのにちなんで名づけられた。この部屋の入り口の上の欄間は珍しく非対称で、左側には5羽の雀が描かれているが、右側には4羽しかいない。この雀は、有名な画家集団である狩野派の後継者で、狩野派を幕府公認の御用絵師にまで押し上げた狩野探幽（かのうたんゆう）（1602～1674）によって描かれたと言われている。描かれた雀があまりにも見事だったので、一羽の雀が生命を得て飛び去ったのだそうだ。同じような奇跡が、近くにある知恩院や西本願寺の欄間でもこの不思議が見られたそうである。

2) 火除けの阿弥陀如来

寺院の伝説によると、この像は、応仁の乱の初年（1467-1477）に寺院のほとんどが焼けてしまった焦熱地獄の中で奇跡的に救われた。「火除け阿弥陀如来」は、863年に真紹僧都（797～873）が寺院を設立した時の五体の銅像の1つであると考えられている。しかし、この像の様式は鎌倉時代（1185～1333）の典型である。また、いくつかの確認できる視覚的要素は、それが応仁の乱の終結後何世紀もの後に製作された可能性を示唆している。

3) 悲田梅（ひでんばい）

釈迦堂の柱の1つにある木製の飾り額は、施し物の梅、悲田梅を表している。梅の木は、永観律師（1033-1111）が薬王院のために植えた果樹園に残った一本である。永観はお寺の敷地内に薬王院を建設し、病人や貧しい人々に治療を施し、梅の実から作られた薬を与えた。梅の木の名前は自分自身の中で培うべき3つの価値ある習慣である三福田（さんぷくでん）に由来している。三福田は次のとおりである。貧しい人への思いやり悲田（ひでん）、両親への感謝の恩田（おんでん）、仏教の三宝（仏、法、僧）への敬意を表す敬田（きょうでん）である。名前の「-bai」の部分は「梅」を意味します。

4) 木魚蛙（もくぎょがえる）

4月下旬から6月上旬にかけて、観光客は御影堂から開山堂を通る際、寺院ではよく読経に合わせて叩かれる、木魚という魚の形をした木製の太鼓の音に似た、奇妙な音を聞くことがある。しかし、この音の源は、橋の近くのどこかに住んでいる森アオガエルの鳴き声であると考えられている。毎年多くの訪問者が木魚の音を聞いたと報告しているが、伝説の蛙を見た人は誰もいないのである。

5) 三鉢の松（さんこのまつ）

御影堂から北に続く橋の反対側には、1200 年以上の歴史を持つ木があると信じられている。伝説によれば、この木は真言密教の創始者である弘法大師空海（774–835）と関係がある。空海が中国から帰国する準備をしているとき、彼は三鈷杵（さんこしょ 凡語でバヤラ）と呼ばれる三叉の密教佛具を日本に向かって投げた。

数年後、空海は奈良の山々を歩き回っていたとき、黒と白の2匹の犬を連れた狩人の姿をした狩場明神（かりばみょうじん）に出会った。空海は、新しい寺院を設立する場所を探していると言った。狩人は犬に道案内をさせ空海を高野山へと導いた。空海はそこで松の枝からぶら下がっている三鈷杵を発見した。通常は二本一対で成長する松葉であるが、この松は不思議に葉が長く、三本が一組になっていて、三鈷の形に似ていた。空海はその場所に、真言密教の本山になる金剛峯寺（こんごうぶじ）を建設した。

永観堂の「三鈷の松」は、高野山の原木の松の根の一部を移植して育てたのである。三鈷の松の三本の葉をいただくと、「智慧、慈悲、真心」という3つの美德を授かると言われている。

6) 臥龍廊（がりゅうろう）

開山堂へ通じる屋根付きの回廊は、山の急斜面を右に緩やかに曲がり上る階段は、岩の上に横たわる龍の姿に似ていることから、臥龍廊（ガリュウロウ）と呼ばれている。この木製の回廊階段は20世紀初頭にわずかに改造されたが、元々は約400年前に日本の伝統的な木材接合技術のみを使用して建てられた。

7) 岩垣もみじ（いわがきもみじ）

開山堂から、そして臥龍廊のすぐ下には、山の側面から斜めに外に向かって成長した珍しいモミジ（イロハモミジ）が目に入る。永観堂の敷地内や周辺には約3,000本ものモミジがあるといわれており、秋の紅葉を楽しむには絶好の場所として知られている。もともとの土地の所有者であった藤原関雄（805–853）はモミジの和歌を詠んだ。

奥山の 岩垣もみじ 散りぬべし
照る日の光 見る時なくて （古今集）

（歌の意味）

山の奥深くにある、切り立った岩に取り囲まれているこのコウヨウした木は
きっと葉が散ってしまっただろう。照り輝く太陽の光を見る機会がないままで。